
吉原幻想草紙

緋羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉原幻想草紙

【Nコード】

N3135Y

【作者名】

緋羽

【あらすじ】

身体を売って生きる蝶々。

女郎屋で働く遊女たちは、自身の誇りを灯として宵闇を照らし続ける。

吉原を軸に紡がれる、史実無根の幻想草紙。

夜の蝶々が羽を広げる活気賑わう光の世界。女は身体を晒し、自らの魅力を最大限の魅惑に変えて、夢を求める男達を虜にする。

露出した胸の膨らみをだらしない顔で物色する助平な客には、慣れた文句で唾をつける。

「そのあんた、楽しい夢を見たくはないかい？ちよいとあたしを買ってみなんし」

客引きの雇われ店主は、一人でも上客を増やそうと片っ端から媚びを売る。

「おお、旦那様はお目が高い！この子はこつ見えても店一番の器量良しなんでございますよ！

まあ、ちよいとばかりは値は張りますがね、へへへ…」

まるでこの世の天国よろしく上気した顔が溢れる中で、これまた見慣れ聞き慣れた、泣きわめく女が数人の極道に引きずられていく姿。

「やめて、離して！」

必死に抵抗する八雲。

「何だお嬢ちゃん、親父の借金を返してくれるって言ったろう？」

「私は…、今晚付き合えばおとつあんを助けてくれるって言うから…！」

「嘘は言っていないだろう？」

今晚付き合ってくれりゃあ今晚は親父を助けてやる、明晩付き合ってくれりゃあ明晩も助けてやる。

ただし、付き合ってくれない晩は僕たち拗ねちゃうかも…、なあ皆？」

「八雲ちゃんが居ないと僕たち拗ねちゃうよお！…ふふ、はははははは！」

「…くつ、この外道！」

「違うな、外道じゃなくて極道さ、ひはははは！…！」

*

心を閉ざし涙も流さぬ少女が連れて来られたのは、珍しくもなるともない宿の一室。窓には明るい色の格子がはめられ、売られてきた女の誰もが一度は試みた足抜けを、冷たく阻む。

ドンツと突き出され転げ込んだ広い部屋のあちらこちらで、さして興味も無い見慣れた風景を無視するように、唇や頬に紅を乗せる女たち。

美しい彼女らに目を奪われていた八雲の後ろで、煙管をくわえた女によってかけられた鍵の音が冷たく響いた。

外に面する大窓と同じように、扉に開けられた小窓にも格子がはめられ、だがその色は暗く錆び付いた色であったが。

その小窓から顔を覗かせ、煙管の女が言葉を投げる。

「親父さんの借金分、ようさん働き返しんさいな」

「ここで働くの？だってこっつて…」

「そうさ、女郎屋だよ」

口に含んだ煙を冷たい表情で部屋に吹き入れ、女は廊下の奥へと消えて行った。

「嬢ちゃん、売られたのかい？」

誰もいない扉に向かい茫然と立ちすくむ八雲にかけられた声があった。

振り返ると、先程までとは打って変わり、興味深げに見つめる女、

女、
女。

1 (後書き)

出雲^{イズモ}…遊廓に売られた少女。本名は八雲^{ヤクモ}。

「伊織おいで、仕事だよ！」

別方向にある襖の向こうから呼ぶ声が出て、八雲に話しかけてきた女がけだるそうに立ち上がる。

「あたしは蠅よ、よろしくね」

伊織と呼ばれ蠅と名乗った女は、座敷の奥へと消えていく。仕事をこなすために。

「サソリ？…イオリ？」

混乱する八雲に別の女が声をかけた。

「伊織は源氏名、蠅は愛称さ。ちなみにあたしのごときは燕と呼んどくれ。」

雛菊なんて立派な名もあるんだけどね、菊なんかより、あたしは空を飛ぶ燕の方が好きだからさ」

「…よくわからないんですけど」

自然と敬語になる八雲を可笑しそうに笑い、彼女は真つ赤な紅を、くちづけするように八雲の唇につける。

「あんたは遊女になったんだ。目指すは太夫、それとも格子かい？ふふふ、手前の人生嘆くより、楽しく生きていこうじゃないか。」

人に決められた名に縛られるな。ここの仲間の前でくらい、あんたはあんた自身で決めた名を名乗んな」

燕は自分のかんざしを八雲の髪に刺してやった。

「私はさつき『あんたは今日から出雲だ』って言われたから…、私の名前はイズモです…」

「そっかい。まあいいさ、誰だって最初から手前の苦遇を受け入れられるわけじゃない。」

出雲、…手前の人生に負けんじやないよ」

*

最も人で賑わう時間、夜でも明るいまさに不夜城。悲しむ暇すら与えられず、早くも男に買われる出雲。

抵抗するのは早々に諦め、しおらしく豚鼻の糞野郎に礼を尽くす。

「出雲と申します、よろしくお願いいたします」

「出雲ちゃんか、楽しい夜になりそうだねえ、うひよひよ…」

*

何度も、何度も…、這い回る舌を通し…、甘い味と花の様な香りを感じて…。

綺麗とは程遠いその造形…、柔らかく脂っこい男の身体。

下腹部が疼き、足の付け根からは意思と相反する蜜が垂れ、男を溺れ殺したいかのように卑猥に溢れ出す。

実際、男は死んでいたのだが。

男の身体には刃物、ならぬかんざしが刺さっている。昏間に燕からもらったかんざしが。

出雲が舌を這わせ蜜を垂れ流すほどに、男の排泄物と血が、時間の経過とともに、ゆっくり…、ゆっくり…、床を湿らせていく。

僅かに開いた襖の隙間から覗きこんだ遊女の一人が、悲鳴をあげるでもなく部屋に入り込む。

「どうしたんだい？」

「あ…、蠍さん…。」

この人がもつと刺激をくれと言うから、刺したんです。何度も、何度も…。

そしたら……、逝ってしまったみたい……」

2 (後書き)

伊織^{イオリ}…遊女。愛称は蠅^{サンリ}。

雛菊^{ヒナギク}…遊女。愛称は燕^{ツバメ}。

口笛を吹いて豪快に笑いながら、雇われ掃除夫達を呼ぶ伊織。

「あんたら、掃除しといとくれ。」

お客さんが臍物ぶちまけて逝つちまつたんだとさ」

数人の男が駆け付け、慣れた手つきで死体を片付けた。

*

「ははは、あんなかなかやるねえ、気に入ったよ！」

出雲だっけ？ここはこんな所だけどね、だからこそ仲間の絆は強いってもんだ。

上客には誠意を持ち、クズには死を持って相手すれば良いんだよ

！はっはは！！」

「…蠅さん、燕さん、皆さん、私決めました。

自分の人生、自分で決めます。

手前の人生に負けてたまるか！」

「よく言った！」

「あたしら皆、あんたの味方だよ！」

「出雲、これからも楽しもうぜ！！！！」

遊女達の拍手喝采を浴び、それが自分を元氣付けてくれるための過剰な言葉だと気付いていても、出雲は素直に喜んだ。

そして昼から考えていた文句を告げる。

「私は自分で名を決めます。

八雲ではない、出雲でもない、私がこれから名乗る名前は…、蜘蛛。

雲のような自由はなくとも、蜘蛛のようにしぶとく生きてみせる！
そして目指すは花魁太夫！！！！」

呆氣にとられる一同。笑いを堪えつつ、伊織が問う。

「…あんた、花魁とか太夫とか、意味わかって言ってるのかい？」

「わからないけど目指します！」

室内が一瞬の沈黙に包まれた後、笑いと歓声が沸き起こった。

「あはははは！あんた最高だよ！」

確かにあんたは蜘蛛だね、まさに女郎蜘蛛さ！

あつはははは！！！！

涙を流して大笑いする伊織を筆頭に、再び浴びせられる拍手喝采。気恥ずかしさと若干の誇らしさを胸に抱いて、頬を鮮紅に染める出雲の顔には、年相応の愛らしい笑顔が戻っていた。

脱皮を繰り返す女郎蜘蛛は、腹部下面に鮮紅色の紋がある。女郎として働く出雲の腹部にも、時折、薄紅色の紋があった。

それは、ある時は男の血、ある時は自らの女の証。またある時は、仲間の遊女との戯れの名残として、麗しい唇の痕が残っているのがあった。

*

夜の蝶々が羽を広げる活気賑わう光の世界。女は身体を晒し、自らの魅力を最大限の魅惑に変えて、夢を求める男達を虜にする。

露出した胸の膨らみをだらしのない顔で物色する助平な客には、慣れた文句で唾をつける。

「そのあんた、楽しい夢を見たくはないかい？ちよいとあたしを買ってみなんし」

一柄財布の紐と同じように緩みきった客の口元、その口から発せ

られる問いに、遊女が艶やかな視線と舌舐めずりを見せつけ、そして答える。

「あたしの名かい？」

あたしは蜘蛛、……女郎蜘蛛さ」

3 (後書き)

蜘蛛の章「完」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3135y/>

吉原幻想草紙

2011年11月7日13時09分発行